

注文の多い料理店

宮沢賢治

https://www.aozora.gr.jp/cards/000081/files/43754_17659.html

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1997（平成9）年5月10日17刷

初出：「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」盛岡市杜陵出版部・東京光原社

1924（大正13）年12月1日

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年1月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二人の若い^{しんし}紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、
ぴかぴかする^{てっぽう}鉄砲を^{しろくま}かついで、^{ひき}白熊のような犬を二疋つれて、
^{やまおく}だ**いぶ山奥**の、木の葉のかさかさした^いところを、こんなことを云い
ながら、あるいておりました。

「^けぜんたい、^{けもの}ここらの山は怪しからんね。鳥も獣も一疋も居やが
らん。なんでも構わないから、早くタンタアーンと、やって見た
いもんだなあ。」

「^{しか}鹿の黄いろな横っ腹なんぞに、^{みまい}二三発お見舞もうしたら、^{たお}ずい
ぶん痛快だろうねえ。くるくるまわって、それからどたっと倒れ
るだろうねえ。」

それはだ**いぶ**の山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちも、
ちょっとまごついて、どこかへ行ってしまったくらいの山奥で
した。

それに、あんまり山が物^{ものすご}凄いので、その^{うな}白熊のような犬が、二
疋いっしょに^{あわ}めまいを^は起こして、しばらく吠って、それから泡を
吐いて死んでしまいました。

「じつにぼくは、二千四百円の損害だ」と一人の紳士が、その犬
の^ま眼ぶたを、ちょっとかえしてみte言いました。

「ぼくは二千八百円の損害だ。」と、もひとりが、くやしそう
に、あたまをまげて言いました。

はじめの紳士は、すこし顔いろを悪くして、じっと、もひとりの
紳士の、顔つきを見ながら云いました。

「^{もど}ぼくはもう戻ろうとおもう。」

「さあ、ぼくもちょうど寒くはなつたし腹は空いてきたし戻ろうとおもう。」

「そいじゃ、これで切りあげよう。なあに戻りに、昨日の宿屋きのうで、山鳥じゅうえんを拾円も買って帰ればいい。」

「兎うさぎもでていたねえ。そうすれば結局おんなじこった。では帰ろうじゃないか」

ところがどうも困ったことは、どっちへ行けば戻れるのか、いっこうに見当がつかなくなっていました。

風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。

「どうも腹が空いた。さっきから横っ腹が痛くてたまらないんだ。」

「ぼくもそうだ。もうあんまりあるきたくないな。」

「あるきたくないよ。ああ困ったなあ、何かたべたいなあ。」

「喰たべたいもんだなあ」

二人の紳士は、ざわざわ鳴るすすきの中で、こんなことを云いました。

その時ふとうしろを見ますと、立派な一軒いっけんの西洋造りの家がありました。

そして玄関には

RESTAURANT

西洋料理店

WILDCAT HOUSE

山猫軒

という札がでていました。

「君、ちょうどいい。ここはこれでなかなか開けてるんだ。入ろうじゃないか」

「おや、こんなところにおかしいね。しかしとにかく何か食事ができるんだろう」

「もちろんできるさ。看板にそう書いてあるじゃないか」

「はいろうじゃないか。ぼくはもう何か喰べたくて倒れそうなんだ。」

二人は玄関に立ちました。玄関は白い瀬戸の煉瓦せと れんがで組んで、実に立派なもんです。

そして硝子の開き戸がらすがたって、そこに金文字でこう書いてありました。

「どなたもどうかお入りください。決してご遠慮えんりよはありません」

二人はそこで、ひどくよろこんで言いました。

「こいつはどうだ、やっぱり世の中はうまくできてるねえ、きょう一日なんぎしたけれど、こんどはこんないいこともある。このうちちそうは料理店だけれどもただでご馳走するんだぜ。」

「どうもそうらしい。決してご遠慮えんりよはありませんというのはその意味だ。」

二人は戸おを押して、なかへ入りました。そこはすぐ廊下ろうかになっていました。その硝子戸の裏側には、金文字でこうなっていました。

「ことに肥ふとったお方や若いお方は、大歓迎だいかんげいいたします」

二人は大歓迎というので、もう大よろこびです。

「君、ぼくらは大歓迎にあたっているのだ。」

「ぼくらは両方兼ねてるから」

ずんずん廊下を進んで行きますと、こんどは水いろのペンキ塗^ぬりの扉^とがありました。

「どうも変な家だ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだらう。」

「これはロシア式だ。寒いとこや山の中はみんなこうさ。」

そして二人はその扉をあけようとしますと、上に黄いろな字でこう書いてありました。

「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください」

「なかなかはやってるんだ。こんな山の中で。」

「それあそうだ。見たまえ、東京の大きな料理屋だって大通りにはすくないだらう」

二人は云いながら、その扉をあけました。するとその裏側に、

「注文はずいぶん多いでしょうがどうか一々こらえて下さい。」

「これはぜんたいどういうんだ。」ひとりの紳士は顔をしかめました。

「うん、これはきっと注文があまり多くて支度^{したく}が手間取るけれどもごめん下さいと斯^こういうことだ。」

「そうだろう。早くどこか室^{へや}の中にはいりたいもんだな。」

「そしてテーブルに座^{すわ}りたいもんだな。」

ところがどうもうるさいことは、また扉が一つありました。そ

してそのわきに鏡がかかって、その下には長い柄のついたブラシえが置いてあったのです。

扉には赤い字で、

「お客さまがた、ここで髪かみをきちんとして、それからきもの
の泥どろを落してください。」

と書いてありました。

「これはどうも尤もっともだ。僕もさっき玄関で、山のなかだとおもって
見くびったんだよ」

「作法えらの厳しい家だ。きっとよほど偉い人たちが、たびたび来る
んだ。」

そこで二人は、きれいに髪くつをけずって、靴の泥を落しました。

そしたら、どうです。ブラシを板の上に置くや否や、そいつが
ぼうっとかすんで無くなって、風がどうっと室の中に入ってきました。

二人はびっくりして、互たがいによりそって、扉をがたんと開けて、
次の室へ入って行きました。早く何か暖いものでもたべて、元氣
をつけて置かないと、もう途方とほうもないことになってしまうと、二
人とも思ったのでした。

扉の内側に、また変なことが書いてありました。

「鉄砲たまと弾丸をここへ置いてください。」

見るとすぐ横に黒い台がありました。

「なるほど、鉄砲を持ってものを食うという法はない。」

「いや、よほど偉いひとが始終来ているんだ。」

二人は鉄砲をはずし、帯皮を解いて、それを台の上に置きました。

また黒い扉がありました。

「どうか帽子と外套と靴をおとり下さい。」

「どうだ、とるか。」

「仕方ない、とろう。たしかによっぽどえらいひとなんだ。奥に来ているのは」

二人は帽子とオーバーコートくぎを釘にかけ、靴をぬいでぺたぺたあるいて扉の中にはいりました。

扉の裏側には、

「ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡めがね、財布さいふ、その他金物類、
ことに尖ったものは、みんなここに置いてください」

と書いてありました。扉のすぐ横には黒塗りの立派な金庫も、ちゃんと口を開けて置いてありました。鍵まで添えてあったのです。

「ははあ、何かの料理に電気をつかうと見えるね。金気かなけのものはあぶない。ことに尖ったものはあぶないと斯う云うんだらう。」

「そうだらう。して見ると勘定かんじょうは帰りにここで払うのだらうか。」

「どうもそうらしい。」

「そうだ。きっと。」

二人はめがねをはずしたり、カフスボタンをとったり、みんな

金庫のなかに入れて、ぱちんと錠じょうをかけました。

すこし行きますとまた扉とがあって、その前に硝子がらすの壺つぼがありました。扉こには斯う書いてありました。

「壺のなかのクリームを顔や手足にすっかり塗ってください。」

みるとたしかに壺のなかのものは牛乳のクリームでした。
「クリームをぬれというのはどういうんだ。」

「これはね、外がひじょうに寒いだろう。室へやのなかがあんまり暖いとひびがきれるから、その予防なんだ。どうも奥には、よほどえらいひとがきている。こんなところで、案外ぼくらは、貴族とちかづきになるかも知れないよ。」

二人は壺のクリームを、顔に塗って手に塗ってそれから靴下をぬいで足に塗りました。それでもまだ残っていましたが、それは二人ともめいめいこっそり顔へ塗るふりをしながら喰べました。

それから大急ぎで扉をあけますと、その裏側には、

「クリームをよく塗りましたか、耳にもよく塗りましたか、」

と書いてあって、ちいさなクリームの壺がここにも置いてありました。

「そうそう、ぼくは耳には塗らなかった。あぶなく耳にひびを切しゅうとうらすとこだった。ここの主人はじつに用意周到だね。」

「ああ、細かいとこまでよく気がつくよ。ところでぼくは早く何か喰べたいんだが、どうも斯うどこまでも廊下じゃ仕方ないね。」

するとすぐその前に次の戸がありました。

「料理はもうすぐできます。

十五分とお待たせはいたしません。

すぐたべられます。

早くあなたの頭に瓶びんの中の香水ふをよく振りかけてください。」

そして戸の前には金ピカの香水の瓶が置いてありました。

二人はその香水を、頭へぱちやぱちや振りかけました。

ところがその香水は、どうも酔すのような匂においがするのでした。
「この香水はへんに酔すくさい。どうしたんだろう。」

「まちがえたんだ。下女が風邪かぜでも引いてまちがえて入れたんだ。」

二人は扉をあけて中にはいました。

扉の裏側には、大きな字で斯う書いてありました。

「いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう。お気の毒でした。
もうこれだけです。どうかからだ中に、壺の中の塩をたくさん
よくもみ込んでください。」

なるほど立派な青い瀬戸の塩壺は置いてありましたが、こんど
というこんどは二人ともぎょっとしてお互にクリームをたくさん
塗った顔を見合せました。

「どうもおかしいぜ。」

「ぼくもおかしいとおもう。」

たくさん

「沢山の注文というのは、向うがこっちへ注文してるんだよ。」

「だからさ、西洋料理店というのは、ぼくの考えるところでは、
西洋料理を、来た人にたべさせるのではなくて、来た人を西洋料
理にして、食べてやる家うちとこういうことなんだ。これは、その、

つ、つ、つ、つまり、ぼ、ぼ、ぼくらが……。」がたがたがたがた、ふるえだしてもうものが言えませんでした。

「その、ぼ、ぼくらが、……うわあ。」がたがたがたがたふるえだして、もうものが言えませんでした。

「遁げ……。」がたがたしながら一人の紳士はうしろの戸を押そ
いとしましたが、どうです、戸はもう一分も動きませんでした。

奥の方にはまだ一枚扉があって、大きなかぎ穴が二つつき、銀
いろのホークとナイフの形が切りだしてあって、

「いや、わざわざご苦労です。

大へん結構にできました。

さあさあおなかにおはいりください。」

と書いてありました。おまけにかぎ穴からはきよろきよろ二つの
青い眼玉がこっちをのぞいています。

「うわあ。」がたがたがたがた。

「うわあ。」がたがたがたがた。

ふたりは泣き出しました。

すると戸の中では、こそこそこんなことを云っています。

「だめだよ。もう気がついたよ。塩をもみこまないようだよ。」

「あたりまえさ。親分の書きようがまずいんだ。あすこへ、いろ
いろ注文が多くてうるさかったでしょう、お気の毒でしたなん

て、間抜けたことを書いたもんだ。」

「どっちでもいいよ。どうせぼくらには、骨も分けて呉れやしない
んだ。」

「それはそうだ。けれどももしここへあいつらがはいって来な
かったら、それはぼくらの責任だぜ。」

「呼ぼうか、呼ぼう。おい、お客さん方、早くいらっしやい。いらっしやい。いらっしやい。お皿さらも洗ってありますし、菜っ葉ももうよく塩でもんで置きました。あとはあなたがたと、菜っ葉をうまくとりあわせて、まっ白なお皿にのせるだけです。はやくいらっしやい。」

「へい、いらっしやい、いらっしやい。それともサラダはお嫌いですか。そんならこれから火を起してフライにしてあげましょうか。とにかくはやくいらっしやい。」

二人はあんまり心を痛めたために、顔がまるでくしゃくしゃの紙屑かみくずのようになり、お互にその顔を見合せ、ぶるぶるふるえ、声もなく泣きました。

中ではふっふっとわらってまた叫さけんでいます。

「いらっしやい、いらっしやい。そんなに泣いては折角のクリームが流れるじゃありませんか。へい、ただいま。じきもってまいります。さあ、早くいらっしやい。」

「早くいらっしやい。親方がもうナフキンをかけて、ナイフをもって、舌なめずりして、お客さま方を待っていられます。」

二人は泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。

そのときうしろからいきなり、

「わん、わん、ぐわあ。」という声がして、あの白熊しろくまのような犬が二疋、扉をつきやぶって室の中に飛び込んできました。鍵穴の眼玉はたちまちなくなり、犬どもはううとうなってしばらく室の中まわをくるくる廻っていましたが、また一声

「わん。」と高く吠えて、いきなり次の扉に飛びつきました。戸はがたりとひらき、犬どもは吸い込まれるように飛んで行きました。

その扉の向うのまっくらやみのなかで、
「にゃあお、くわあ、ごろごろ。」という声がして、それからが
さがさ鳴りました。

室はけむりのように消え、二人は寒さにぶるぶるふるえて、草
の中に立っていました。

見ると、上着や靴くつや財布さいふやネクタイピンえだは、あっちの枝にぶら
さがったり、こっちの根もとにちらばったりしています。風がど
うと吹ふいてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごどん
ごどんと鳴りました。

犬がふうとうもどなって戻ってきました。

そしてうしろからは、

だんな「旦那あ、旦那あ、」と叫ぶものがあります。

にわ二人は俄かに元気がついて

「おおい、おおい、ここだぞ、早く来い。」と叫びました。

みのぼうし 簷帽子をかぶった専門りょうしの猟師が、草をざわざわ分けてやってき
ました。

そこで二人はやっと安心しました。

そして猟師のもってきた団子だんごをたべ、途中とちゅうで十円だけ山鳥を
買って東京に帰りました。

しかし、さっき一ぺん紙くずのようになった二人の顔だけは、
東京に帰っても、お湯にはいっても、もうもとのとおりになおり
ませんでした。